

## ここがポイント！自然が再生する「かいぼり」のはなし

認定 NPO 法人生態工房 片岡 友美

### 1. かいぼりと里山の生物多様性

かいぼりとはため池や水路の維持管理作業の一種で、本来は貯水量を向上させるために池等の水を抜き、底泥を「掻いて掘る」すなわち泥をかき出すことが主な目的である。地方によっては排水と一緒に泥を押し流す「泥流し」「土砂吐き」と呼ばれるやり方で、かいぼりと同じ効果を得るところもある。また、池の水を抜いた後しばらく水を入れずに放置する状態、すなわち池干しは堤体や護岸に負荷をかけないメリットがあり、ついでにこれらの設備点検や修理を行うこともある。さらに、かいぼりのついでに魚や貝などを捕って食べる「貝掘り」や「雑魚取り」は、地域の人たちのお楽しみイベントでもある(写真1)。



写真 1-1 弟池のじゃこ（雑魚）取り  
(兵庫県高砂市、2018年11月)



写真 1-2 コイを持ち帰る参加者

しかも、大勢が池に入って魚捕りをするにより底泥が攪拌されるため、この濁水を排水して泥流しもやれる一石二鳥のイベントである。このようにかいぼりは農村部の協同作業として大勢の人たちが関わり、主に農閑期の秋から冬にかけて、毎年または数年単位で繰り返し行われていた。

ため池や水路の生きものたちにとって、かいぼりは数ヶ月間のうちに水位低下や底泥攪拌、干し上げ、湛水という急激な環境変化をもたらし、数年単位で繰り返しやってくる攪乱である。こうしたかいぼりを含めた農村部の人々の営みが、里山や水田などの二次的自然における生物多様性の維持において、重要な役割を果たしていたと考えられる。

しかしながら、近年、農村部では耕作放棄や人口減少により、かいぼりを行わない地域が増えてきている。また、耕作地であっても土地改良や水路網の発達により、往時のようなため池の利水機能が重視されず、ため池の管理が滞っている場所もある。そのほか、消防水利のために干し上げができないとか、下流の住宅街の苦情で泥を流せないとか、様々な事情でかいぼりが行われなくなり、担い手も減ってきているのが実情である。このような現状において、都市部のみならず農村部でもかいぼりを体験していない世代が増え、最近はいぼりの弊害を語る生きもの好きや自然系の専門家も現れてきた。かいぼりという人為的攪乱とそれによって育まれた里山の生物多様性の歴史や文化について、人々の理解や認識が希薄になっているのではないかと演者は考えている。

演者の所属する NPO 生態工房では、2002 年に都立光が丘公園バードサンクチュアリの池 (0.8ha) のかいぼりをきっかけとして、都市部を中心に各地のかいぼりを体験または実践し、かいぼりによる水辺再生の取り組みも行ってきた。本講演ではこれらの実践や体験で得られた知見や事例をもとに、かいぼりの多面的効果を紹介する。水辺再生に取り組む方々において、定期的なかいぼりと里山における生物多様性保全のあり方を再認識してもらおうきっかけになればと考えている。

## 2. 外来魚駆除で終わらない

かいぼりにおける雑魚取りは、おそらく 1990 年代後半からため池に密放流されたオオクチバスなどの外来魚駆除方法として注目され、ここ数年は都市部の池や濠で市民ボランティアによる魚捕りイベント (写真 2) として流行するようになった。こうした状況から、一般にかいぼりとはすなわら雑魚取りである



写真 2. 都立井の頭恩賜公園のかいぼりイベント (2014 年 1 月)

というイメージが強くなり、しかも外来魚駆除を目的としたイベントという偏った認識が広がっているのではないかと考えられる。かいぼりは外来魚の根絶に最も有効な手段であり、市民参加で駆除に取り組むことは外来種問題の主流化や普及啓発において有効である。当会ではそうした駆除目的のかいぼりイベントをいくつか実践し、他団体へ企画や提案なども行ってきた。しかし、これらの従事者の中には外来魚を根絶したら、もうかいぼりをやる必要がないと考えているケースや、むしろ外来魚がいなくなったら何もしない方が良く、つまり

環境を安定的に維持することが水辺の在来種保全につながると考えているケースもあった。

外来魚の駆除は保全の手段であり、根絶は水辺再生のゴールではないと演者は考えている。外来魚のいなくなった水辺でも、かいぼり等による定期的な攪乱は、より豊かな水辺再生を目指し、里山の生物多様性を保全する重要な要素ではないかと考えている。むしろ、外来魚の影響がなくなった水域であれば、かいぼりによって効果的に水辺が回復する、または保全される可能性が高いのではないかと考える。

### 3. 泥掻きや池干しも重要

泥掻き（泥流しを含む）はかいぼりの主要な作業の一つで（写真3）、排出された泥は栄養塩類の供給源として、周辺の農地や下流域の生物多様性に重要な役割を果たしている。一方、近年は重労働や担い手不足のため泥掻きを省略するかいぼりも増えている。地方によっては、この状態を池干しと呼び、泥掻きを伴うかいぼりと名称を分けて使っているところもある。



写真3. 長野市信里地区ため池の泥上げ  
(2017年12月)

池干しは先に述べたとおり、堤体や護岸に負荷をかけないという維持管理上のメリットがある。自然再生の観点では、ふだん水に浸かっている池底が、池干し中に乾くことで脱窒や湛水後のリンの溶出を抑制する作用があり、池の水質改善に効果的なケースもある。また池底の埋土種子が池干し中に光を受けて発芽し、湛水後に水生植物が繁茂したというケースもある。

演者らが関わる都立井の頭恩賜公園井の頭池（東京都武蔵野市）では、住宅街にある公園の池という立地から、かいぼり時に泥を流したり、池の外へ排出しにくい事情があった。そのため、池干し期間中に採取した底泥は、同池の岸辺に造成した浅場へ投入し、新たに移行帯を整備した。泥掻き、埋土種子の発芽促進、移行帯づくりの3つの取り組みがかいぼりによって同時



写真4. 井の頭池の泥掻きと浅場造成

に行われ、湛水後の井の頭池では在来種が増加し、生物多様性が著しく回復しているところである。

本講演では井の頭池の事例を中心に、かいぼりによる自然再生の取り組みと成果について報告する。